

第一章

梢の夏、穏やかな木洩れ日

東の地平

抜け忍である大蛇丸の実験施設は、当時の木の葉の里にとって脅威であり探索対象であった。テンゾウが実験体として囚われていた場所を発見したメンバーにダンゾウがおり、助け出された後、彼が率いる根の忍びとして育てられた。実験体にされたことも根の忍びとなったことも、当時の幼いテンゾウには回避出来ることなく、与えられた環境に適応していくしかなかった。しかしその後ダンゾウに不信感を抱くようになり、裏切り者として追われる身となったところを三代目火影に救われ、彼の要請により直轄部隊の暗部に移る。

不信感を抱くきっかけになった一つは、すでに根の忍びにもその名が知られていたはたけカカシの写輪眼を奪うという命令であった。

ダンゾウには大局的な視点から必要なことだと言われたが、テンゾウはその命令に、同じ木の葉の忍びを傷つけてまでの価値を見いだせなかった。

そして人生で初めて、自身の意思と与えられた道が一致したという感覚で暗部に入る。

当初は見習いとして訓練中心であったが、木遁使いという唯一無二の血継限界を持つものとして、徐々に重要任務に就くことが求められるようになってくる。一年もすれば、遠距離タイプのテンゾウは、近距離タイプのカカシとバランスを取るように同じ班に配属されることがほとんどになっていた。

ダンゾウも欲する写輪眼を有するはたけカカシは、良くも悪くも、暗部の中でもとかく、注目されていた。特にその躊躇なく敵を謀る戦い方は『冷血のカカシ』と言われ、そして実際に心をどこかに置いてきたような振る舞いは、その通り名を増々広めた。

任務が終了し面を取っても無表情さは変わらず、孤高の位置を貫いている。

カカシのことは根の当時から、際立つ実力者としてその名を知っていた。暗部に入っていく近くで彼の働きを見て、その実力というものが、けして大袈裟ではないと身をもって知る。むしろもつともつと評価されていいはずだとさえ思った。

しかし現実には、カカシの凄さを称える声がある一方で、冷血のカカシという評判と呼応して、酷く彼を中傷する噂を耳にする。

いわく、写輪眼はカカシが仲間のうちはオビトを見捨てて奪ったもの、そしてその秘密を知る野原リンを殺害したと。更にはその大罪が赦免されているのは四代目の寵愛を受けていたから、などという噂もあった。

ただ、ひどい噂の類は、カカシの天才ぶりに嫉妬

したものや、あるいは端正でどこか中性的な魅力のある彼に焦がれて相手にされなかったものが悔し紛れに流布しているという、カカシを擁護する声もあったが。

いずれにせよカカシ本人が、それらの噂に対してわれ関知せずという態度で、そのどこか謎めいた風情が、いつそう噂に拍車をかけていたのは間違いないことであつた。

任務に関することなら打ち合わせから任務が終了するその時までしっかりと必要なコミュニケーションをとるが、それ以外の時間では寡黙になり周囲に打ち解けることはない。

どこか遠い目をして、ずっと集団からすり抜けていく。

テンゾウはいつの間にかカカシの動きを追い、近づきたいと願うようになっていた。頻繁に耳にする

噂も彼を気に留めるきっかけにはなつたかもしれない。そんな冷血と言われる戦い方の中に、テンゾウはどこか無理をしている印象が拭えなかつた。どうしてと聞かれても明確な答えはないが。

実戦能力も非常に高いがそれだけでなくその博識ぶり、観察力、洞察力、などは感心させらればかりであつた。子供のころから天才の名をほしいままにしていたという噂には、それはそうだろうとただ納得する。火影、あるいはそこまですはいかなくても、里の中樞を担う人とはいずれカカシのような才能を持つ人になるのだと思わせた。

共に任務をこなす度、一緒の空間にいるその時間、カカシという存在がどんどん自分の中で大きくなっていく。しかし、多くを語らぬカカシのその背中、誰であれ、彼の内面に一定の距離以上に近づくことを拒否していた。

第二章

その時の任務は悪徳商人による大規模な武器工場へ潜入し、闇の武器製造が確認されれば破壊工作を行うというものだった。敵の用心棒として雇われている抜け忍も相当な手練で、工場内部へ中々進入出来なかった。膠着状態の状況をみて、カカシは面を外し、左目を覆っていた木の葉の額当てを上げる。

テンゾウにとっては、いつもどこか神々しくさえ感じるカカシの写輪眼だった。紅く燃える左の瞳。右の瞳は蒼く深く、思わず引き付けられる。銀の髪、白い肌といずれもが美しいコントラストを描く印象的な容姿。それからのカカシの動きは圧巻だった。敵が繰り出す術を瞬時にコピーし動揺を誘うとともに、蒼白い輝きを放ちながら雷切を発動させしめていく。その鮮やかな戦い方は、見るものを圧倒した。

しかし後半、テンゾウはカカシのチャクラが、微妙に不安定になってきたことに気づく。

「大丈夫ですか？無理しないで」

「え？」

テンゾウがカカシのそばに行き耳打ちすると、カカシが微かに驚いた表情でテンゾウを見つめた。先ほど目の当たりにした印象的な瞳に見つめられ、テンゾウは自分でも知らず、胸が高鳴る。

「無理なんかしてない」

一瞬の後、カカシはすぐに表情を戻し敵に向かっていった。

任務完了後、テンゾウは姿が見えなくなったカカシを探し、ようやく壊れた工場の裏手にあった林の中で、木に凭れているところを見つけた。テンゾウが近づくと、カカシがわずかにたじろぐ。

「カカシさん。大丈夫ですか？」

「・・・テンゾウか・・・。何か用か？」

「用というか、かなり疲れているようだったので、大丈夫かと思つて」

「俺は大丈夫だ。気分を落ち着けているだけ。お前は先に戻れ、隊長にも俺は少し残ると告げている」

そう言つて、黙り込む。テンゾウは気にかかりながらも、カカシの取り付くしまのない様子に仕方なく、その場を離れる。

テンゾウの気配が完全に消えた頃、カカシはその場に倒れこみ、途中雨が降つてきても、そのまま動くことが出来なかった。

里に戻つて数日後、テンゾウはカカシが入院していると暗部控室で聞いた。肺炎を併発しているという。あの時感じたチャクラの乱れ、本人は取り繕っていたが、本当はかなりの疲労だったのだろう。そ

ういえば林で別れた後、雨が降つて来た。肺炎という事は、あの雨に打たれたに違いない。

チャクラの乱れを感じたのに、そのままカカシを一人にしてしまった自分に対する後悔と、疲労を隠していたカカシへの苛立ち。

仲間を見捨てはしないのに、身を挺して仲間を守るのに、その仲間にカカシ自身は心を開くことがない。暗部に入つて物理的にカカシと一緒にいる時間は多くあるのに、心の距離が近づいたと思えることはなかった。

暗部専用病棟に入院中というカカシを、テンゾウは見舞つた。

普段より細いと感じるその腕に点滴をつながれ、ぐつたりとベッドに横たわっている人は、鮮やかに敵を倒しているカカシと別人のようだった。寝乱れた髪が額にかかり、閉じたまつ毛が長く、普段隠れ

ている唇は薄桃色でそばにあるほくろと合わせて、少女のようにすら見える。病衣から覗く肌はシートと同化するように白く、どこを見てもなんだか目のやり場に困り、テンゾウは落ち着かずにそばの椅子に足を引っ掛けてしまう。その物音でカカシが目を開けた。

「テンゾウ？」

「す、すいません。起こしちゃって・・・」

慌てて椅子を起こしながら、どうしてこんなに動揺しているのか自分でも分からずあたふたとする。

「いや・・・どうした？緊急？」

カカシの目つきが一瞬鋭くなる。

「そ、そうじゃなくて、入院されたと聞いたので、あの、大丈夫ですか？」

カカシが青白い顔をしながらも、ふと、表情を緩めた。

「見舞いに来たのか？大した事ないのに」

「そんな点滴につながれて、充分大したことに思えますけど」

「抗生物質の点滴らしい。俺は家で寝てれば治ると思うけど、三代目様に命令されて仕方なく」

「すいません・・・」

「なんでお前が謝る？」

「カカシ先輩のチャクラの乱れを感じたのに、あの後そのままに帰ってしまったって」

カカシがまた微笑んで答えた。

「誤魔化したつもりだったけど、お前には気づかれてたんだよな。俺も修行が足りない」

自分がカカシの異変に気付けるのはそれだけあなたを見ているからだとテンゾウは思ったが、口には出さなかった。

カカシはいつも無表情で話しかけることも拒まれる雰囲気を醸し出しているので、微かな表情筋の緩みさえもテンゾウにとっては心躍るような気持ちにさせられる。

病院という守られた環境で、体調も万全ではない状態で、いつもの殺気だった防御本能が鳴りを潜めているのだろうと思う。端正な顔立ちが笑うと童顔になる。きつとカカシの本質は、こんな柔らかな笑顔の人なのだとテンゾウは確信する。

普段ももつと笑えればいいのに。

そんなことを突然思った。

カカシがもつと、今みたいに、笑えればいいのに。

四歳年上で、自分よりはるかに高い能力を持つ雲の上のような人だと分かっているけど、テンゾウはカカシが笑えるように力を尽くしたい、そのためにどうすればいいのだろうと考えじつと見つめる。

するとカカシがテンゾウと視線を合わせ、また柔らかに微笑んだ。

「そんなに見られると、俺に穴が開きそう」

途端にカーツと顔中が熱くなった。恥ずかしさでしどろもどろになる。

「いや、あの、あのですね。あ、もう僕、帰ります。む、無理しないでゆつくり休んでください。じゃ」

逃げるように病室を去る。病院を出ても、ベッドに横たわるカカシの寝姿がフラッシュバックし、動悸がする上に下腹部がじわつと熱くなる現象に、テンゾウはどうしていいか判らず息が切れるまで走り続けた。

第三章

暗部に所属して数年過ぎるうちに、カカシがチャクラを使い果たした挙句に入院にまで至る場面に何度か出合うこととなった。

能力が高い分、カカシはより困難な任務を求められ、身を挺してそれを全うする。ぎりぎりまで周囲に気づかれぬよう動き、結果的に突然倒れる。もちろん倒れることがそうそうあるわけではないが、カシの自分を顧みない動きには苛立ちさえ募る。

常に仲間の命を最優先にし、自身敵と向かいながら、仲間が危険に曝されると瞬時に対応する。助けられた方が、助けられたと気づかぬ程一瞬に、カカシは機敏に対応し、そして自身の功績を口にするのではない。

そのカカシの行動を褒めることはテンゾウには出来なかった。もっと自分を大切にしてほしいと思う。

そしてカカシは相変わらずプライベートでは周囲と一線を引いており、もう少し打ち解けられないものかと、テンゾウはカカシの心の遠さに寂しさを感じていた。

その時の任務は、山の中に潜んでいる標的を探し出すのが目的だったが、中々足取りを掴めず、悪天候の山の中を這いずり回るような任務にそれぞれが心身ともに疲弊していた。結局、それまで考えていた所とは大きく離れた位置が怪しいというカカシの提案が功を奏し、最終的には全員を捕らえた。予定より長くなり、兵糧丸もつき、天候不良も重なって誰もが疲れ切って里に帰還した。

重い足を引きずるように控室に戻り、この任務の隊長を務めた年長の樫が締め言葉を発した。

「皆ご苦労さん。今回の任務は大変だったが、結果的に無事に終えることが出来た。俺は三代目に報告に行くから、ここで解散とする」

「お疲れ様でした」

それぞればらばらと、帰り支度を始めた時、樫がカカシのそばへ行き、肩をポンポンと叩いた。

「さすがだったな。お前の読みはいつもの確だ」

その場面をちらと横目で見たカカシより少し年長のカズキが突然大声を出した。

「あーあ、結局いつもカカシだけが評価されるんだよなあ」

樫が振り返って宥める。

「おい、任務の成功は皆の協力あつてのことだ。俺はカカシの読みを褒めたのであつて」

「樫隊長だけじゃないです。きっと三代目も報告を聞いてカカシの活躍を評価するでしょ」

カズキと同世代のカツミも同調する。

「なんといつても上からの信頼は厚いからねえ」

「さすが四代目の愛人だっただけあるな。年上受けするんだよ」

「カカシが火影室に報告書持って行くときは、ついでに足も開いてるって噂は本当だったのか？」

「何を言って・・・」

テンゾウが怒りのあまり言葉すら最後まで紡げずカツミに殴りかかろうとしたが、カカシに腕を抑えられた。

「やめろ。仲間内の暴力は懲罰対象だ」

「暴言はいいんですか！カカシ先輩に向かって、あんなこと・・・」

「別に、気にしてない」

カズキが呆れた顔を露骨に見せて言う。

「ふん、テンゾウも随分カカシに入れ込んでいるが、お前も誑かされているのか。年上から年下まで、お盛んなことで」

テンゾウがカカシの手を振り払いカズキたちに向かおうとしたところで、櫛が一喝した。

「いい加減にしろ！」

その大声に場は一瞬で静まり返る。

「さっき言っただろう、今回の任務は終了だ。解散！」

カカシはずっとシャワールームへ消え、カズミとカズキもぶすつとした表情ながら荷物を抱えてその場を去った。テンゾウだけは怒りのあまりぶるぶるとする拳を抑えることが出来ずに、その場に立ち尽くしていた。

その様子を見た櫛がテンゾウに近づく。

「テンゾウもいったん帰れ。俺も報告に行つて一度シャワー浴びるから、後で合流しよう。飯奢るからちよつと話そうぜ」

「櫛さん、カカシ先輩があんなこと言われて・・・」

「後でな、七時に居酒屋小枝で待ち合わせだ」

約束の時間に居酒屋小枝で、テンゾウは今回任務の隊長を務めた櫛と向かい合つて座っていた。年齢と関係なく実力で選ばれるため、若い者も多い暗部の中では櫛は比較的年長で、性格も鷹揚で皆からの信頼は厚い。

「お前は未成年だから、酒は俺だけだな」

そう言つて櫛はビールとウーロン茶を頼み、なんでも食えとメニューをテンゾウに渡した。

テンゾウは適当に食い物を注文して、店員が去つたところで口を開く。

「どうしてカカシ先輩にあんな酷いことをいうやつがいるんですか。僕は暗部に入ってから、何度か聞きました、先輩が四代目の愛人だったとかなんとか……。噂を言うやつに僕はいつも怒って反論してましたが、面と向かってカカシ先輩に言うなんて……。腹が立って眩暈すらします」

樫が両肘をテーブルについて、組んだ手の甲に顎を乗せた。

「あれはさ、カカシも悪いんだよ」

樫の意外な言葉にテンゾウは心底驚く。

「悪口言われた方も悪いってどうして？」

店員が飲み物を持ってきたので一度話を中断し、去ったところで改めて樫が口を開いた。

「カカシがさ、もうちよつと優しくしてやれば……」

「どういふことですか？」

「半年くらい前だったかな……。俺は夜からの火影護衛に当たっていて、仮眠室にいたんだよ。一番奥のベッドで休んでいたら、カズキとカカシが連れ立って入ってきて」

樫はビールを飲んでまた話を続ける。

「カカシは俺の存在に気づいていたけど、カズキは周囲なんか考えてなかった。必死だったんだよ。カカシに告白するのに」

「告白？カズキさんが？」

「同性を好きになることはまま、あるさ。俺達は特に閉鎖的な集団だし。カズキは真剣に好きだと、付き合ってほしいと伝えていた。俺は布団をかぶっていたけど、その必死ぶりが伝わったよ。でもさ、カカシの返事があまりに酷くて」

「酷い？」

「うん、俺は男に興味はないし、男を好きな変態にはもつと興味ないって」

「変態・・・」

確かに酷い言葉とテンゾウも思う。

『迷惑なので、俺にそんな気持ちにはもう持たないでください』とカカシが言ったら、カズキは走って出て行ったよ。その後、カカシが俺に話しかけてきた。

『そこにいるのは樫さんでしょう。仮眠の邪魔してすいません』ってさ。俺は起きてカカシに言った。『お前もうちょっと優しく断れないのか』って。そして・・・」

「そしたら？」

『本音を言ったまでです』ってそっけなく帰ったよ。まあ、四代目の愛人とかって言われているのもついでに否定するために、男好きな変態って表現使ったのかもしれないけど。それからいい加減面倒とい

うのもあるのかな。あんなにとつつき悪い割にあいつはモテるから。とにかくカズキのカカシへの悪態は、振られた腹いせだろうよ」

樫はそこで一口ビールを飲み、再び話を続けた。

「カカシが悪い奴じゃないって俺は分かっている。冷血のカカシって言われても、あいつの行動はいつも仲間の危機に反応してるだけなんだ。そんな事、仮にも暗部の忍びならみんなわかっているさ。だからこそ、あいつのこと好きになるやつもいるんだよ。顔しか取り柄がなかったらモテやしない。俺はもうちょつと周囲との付き合い方っていうか、社交的になれば、少なくとも写輪眼を盗んだとかレベルの酷い噂は暗部内ではなくなると思う。そこでお前に頼みがあったな。今日は呼び出した」

「頼み？」

「お前のことはカカシも随分目をかけているようだ。お前に話すときはあいつも表情が柔らくなる。だからさ、お前が周囲との垣根を低くするきつかけになれないかなって思うわけよ。もつとカカシの懷に飛び込んでさ」

自分だけではないのだとテンゾウは理解する。自分だけがカカシを尊敬し、一目を置いているわけではない。木の葉の忍びとして共に任務をこなせばカシの凄さを身をもって知り、そして充分評価している人がいる。やはりカカシにはどこか、いずれ人の上に立つと思わせる、惹き付ける要素があるのだ。それを受け入れないのはカカシ自身。

「僕も、カカシ先輩の心に近づきたいと思っています。でも……」

「でもっ」

「難しい。もう何年も僕なりに努力しているけど、どうしてカカシ先輩は……」

「まあ、あいつも大概きつい人生送っているからな。写輪眼を奪ったという噂の出所は、うちは一族らしいって話もある。そりや一族のアイデンティティそのものだから。暗部に引き入れたのは四代目だが、うちはからの写輪眼に絡む批判を避ける意味もあったとか。愛人なんて噂は極端だが、四代目が何かとカカシを目にかけていたのは事実だよ。その師も亡くなっただろう。親父さんも色々あって批判されて自死、しかも亡骸を最初に見つけたのはあいつ本人だったらしいし」

「表の世界にいれば批判され、それからの隠れ場所が暗殺部隊なんて、ほんときついな……」

カカシの心情を思い溜息をついているテンゾウを見て、樫が聞いた。

「お前十八だっけ？」

「？そうです。誕生日が来れば十九に」

急に自分の話を振られ、テンゾウは怪訝そうに答える。

「カカシのこと頼みながら言うのもなんだが、彼女とかいないのか？お前の言うとおり俺たちは暗殺部隊だ。好きな人とか、一息ついて安心出来る世界も持っておかないと、誰でも闇に引き込まれる」

樫の言葉にテンゾウは考える。自分にとって一息つけるのは、好きな人って・・・それは・・・でも、カカシ先輩は男には興味がないのか、そうか・・・。先ほどのカズキに対するカカシの言葉が思い出されて、テンゾウの心がずしんと重くなる。

「テンゾウ？」

ふいに表情を暗くしたテンゾウを気遣い樫が声をかけた。その声に自分が今、彼女の話を聞かれて

カカシを連想したことに気づき、それこそどうして？どうしてカカシ先輩を思い出すのか？とわけの分からない感情で呻きそうになって口元を手で押さえる。

「どうした？」

樫はもう一度尋ねた。

「いや、あの彼女はいないです」

「カカシとはそ」

「カカシ先輩のことは忍びとして尊敬してるだけで！第一カカシ先輩は男には興味がないし」

突然テンゾウが激しく反論する様に声を発したので、樫は驚くと同時にすぐに笑顔を浮かべた。

「いや、俺はカカシとそんな恋話はしないのかと聞こうと思っただけで」

瞬間、テンゾウは思わず口走ったことで自分がカカシに恋していることを自覚した。そしてそれを目

の前の櫓が知ったことも。顔が紅潮するのが自分でもわかる。

「僕は・・・」

「好きなんだな、カカシを。お前もカズキも趣味は悪くないさ、あいつなら。ただ、奴は男に興味ないって言い切ってたから、ハードルは高いけどな」

そうなのだとテンゾウは改めて思う。

自分は恋しているのだ、カカシに。

それが報われぬと分かっても。

実験体にされたこと、根の忍びになったこと、それらはその時に置かれた周囲の環境がもたらしたもので、自分ではどうにもできなかった。でも恋をする心は自分の内にあるものなのに、少しも思い通りにならない不思議さを思う。この苦しい想いにカズキは怒りを露わにし、カカシ本人へぶつけているのか。

そして自分は、自分の気持ちはどう流れていくのだろう。

第四章

その時の任務は情報収集が目的であり、敵を生き
たまま捕らえることが求められた。致命傷を与えて
はいけないということで、むしろ戦いとしてはかな
り苦戦したが、ようやく全員の敵を捕らえた。そし
て敵の一人に縄をかけようとしていたサトヤが、身
を翻した相手に一瞬でクナイを抜き取られ、逆に首
筋にクナイを当てられる。

誰よりも素早く反応したのはカカシだった。すぐ
さま後へ回り込み、敵を羽交い締めにする。テンゾ
ウも木遁を繰り出した。再び拘束された敵が最後の
足掻きと渾身の力を込めて振り上げたクナイが、ま
だ近くにいたサトヤに向かう。瞬身で移動しクナイ
を変わりに受けたのはカカシだった。

「カカシ先輩！」

「カカシ！」

今回の任務で隊長を務めているカズキもそばに来
る。

クナイはカカシの右腕上腕を挟み、血が溢れ出す。
「く……。大丈夫だ。怪我はたいした事ない。」
左手で右腕を押さえ、うずくまりながら、カカシ
が答える。

テンゾウは医療キッドを出して、手当てを行う。
本来のカカシなら自身も怪我することなくクナイを
処理出来たはずだが、この時はそれまでの戦いでチ
ャクラを使い果たしていた。いつものように取り繕
うことすら出来ずに、カカシは蹲ったまま動けなく
なる。

応急処置を終え、テンゾウは近くの湧き水で手ぬ
ぐいを濡らし、カカシの腕に流れた血を拭う。

「悪い……」

「四柱家を建てます。ここで休んで医療忍を呼びましょう」

「俺は一人で大丈夫だから……。捕虜の尋問も早くしないと。う……。皆は先に……。」

「どうしてそういつも嘘つくんですか？大丈夫じゃないでしょう。クナイの傷も結構深いです。ご自分が一番分かっているといますけど」

テンゾウは強い口調でカカシを睨んだ。

カカシはそのテンゾウの本気で怒っている表情を見つめ、自分から視線を逸らす。

「決めるのは隊長だ……。お前でも俺でもない」

カカシの言葉にテンゾウはカズキを振り返った。

「この状態のカカシ先輩を一人には出来ません。カズキ隊長」

「……」

カズキは無言でカカシとテンゾウを見つめた。

今回の任務の隊長は本来カカシに任命されていたのを、それを言い渡された時火影室で一緒にいたテンゾウは聞いている。しかしカカシは構成メンバーを聞いてすぐにカズキを隊長としてくださいと進言していた。理由を問う三代目に、カズキさんも十分な能力があるので、経験も積んでほしいというような事を答えていたが、カカシにいつもいつも悪態をつくカズキを部下にするより、いつも隊長にし、自分がうまく立ち回った方が動きやすいと判断したのだらうと、テンゾウは瞬時に理解した。カズキがカカシに悪態をつく理由は以前、樫に聞いてテンゾウは知っている。

しかし今、フラれた腹いせでこの状態のカカシを置き去りにされる事態は絶対に避けなければならない。テンゾウは隊長であるカズキへ説得の言葉を続けようとした時、カズキが頷いた。

「そうだな。増援の式を飛ばし、医療忍が来るまで休もう。テンゾウ、四柱家を出しカカシが休める場所と、捕虜を置いておく小屋を作ってくれ」

「え、あ、はい」

カズキが思うよりすぐにカカシの休養を承認してくれたので、テンゾウは少し驚きながらも四柱家を自分たち用に、簡便な小屋を捕虜用に建てた。

カズキは四柱家の中で、カカシ以外の三人で捕虜及び周囲の見張りを三時間交代で行うと命令し、最初にサトヤを外へ行かせた。

テンゾウは寝袋を出し、ベストを取ったカカシを横にする。

クナイの傷で熱が出てきたのか、青白いのに頬は赤い。汗を拭きとろうとカカシに声をかけて口布を下す。

「俺はいいから・・・お前も少し休め・・・」

カカシが答える。一緒の任務が多い分、倒れるカシを時折見てきた。入院まで至ることもある。そのたびに見舞いに行っているが、横になっている無防備な姿はいつも年齢より幼く見え、そしてその口元は、色香を感じさせる。

カカシに恋していると以前樫と話していて気づかされた。カズキがいなければ、ずっと顔を見つめていたいほどだ。

カズキもカカシを好きだったはずだが、さっさと寝袋を出して横になっている。

この人は吹っ切れたのかと思う。だからカカシの休養にすぐ賛同してくれたのかもしれない。そう思いながら、テンゾウも見張りの交代までに身体を休めておこうと横になった。

見張り交代時間となり、カズキが決めた順番通り次はカズキが出て行った。引継ぎが随分長くかつ

ていたように感じたが、やがて最初に見張りに出ていたサトヤが戻ってくる。

「カカシの様子はどうか？」

「そうですね。今は眠ってますが、熱が上がってきてるようで」

「怪我は俺のせいだよな」

サトヤがカカシを見つめながら言う。

テンゾウは内心、全くその通り、カカシに迷惑かけずもつと自分で気をつけろよと思ったが、サトヤはカカシよりもさらに先輩で、カズキと同世代だったのですぐに口には出さなかった。

やがて見張りの交代時間が来てテンゾウは外へ出ていく。カズキは大きな木の枝にいたが、テンゾウを見て降りてくる。

「捕虜をトイレに行かせておけ。それと見張りは俺がいたあそこがいい」

と木の枝をカズキが指さした。

「あそこなら、お前が建てた四柱家も周囲も一堂に見渡せる」

「わかりました」

若干、四柱家より離れていると思ったが、周囲の見渡しは確かに良さそうであり、テンゾウも見張りの場所としてそこを使うことにした。

引継ぎをしてカズキは四柱家に戻る。

カズキが四柱家に戻ると、それまで寝袋にいたサトヤが起きてきた。

「さっきの話はマジだよな」

「もちろん」

そばではカカシが寝袋で眠りにについている。熱が上がり寝苦しいのか、小さく寝返りを打つ。

二人はカカシの近くに移動する。

カズキがクナイを口にくわえ、縄を手にしてカカシの寝袋の上に跨る様に四つん這いになる。そしてサトヤはカカシの頭側に膝をついた。

それぞれアイコンタクトを取り、サトヤがカカシの口を右手で押えると同時に、跨っているカズキは全体重で身体を抑え込み、口にくわえたクナイを右手に持ち替えて縦に寝袋を引き裂いた。

カカシが目を開けて、驚きながらも逃れようともがくが、先ほど敵より受けたクナイで痛めた右腕を、自分の上に跨っているカズキに捻りあげられる。痛みにカカシが仰け反ったところをその勢いのまま、サトヤにも肩を押されて身体を返されうつぶせにされた。瞬時にサトヤがカカシの左手も捻りあげ、カズキに素早く縄で両腕を後ろ手で拘束される。

二人とも三代目に選び抜かれた暗部の忍びであり、チャクラを使い果たし、クナイによる怪我とそれか

らの熱で動きを制限されているカカシは制圧されてしまう。

「叫ぶなよ」

カズキがカカシの背中側から身体を抑え込み、喉元にクナイを当てた。

第五章

三時間前、カズキがサトヤと見張り交代のために四柱家から出てきた。

「捕虜及び周囲の異常なし」

サトヤは引継ぎの言葉を述べる。

「了解」

サトヤが戻ろうとしたところでカズキが話しかける。

「カカシは今回かなり具合悪そうだぜ。怪我もしてるからな」

「俺がドジったから。悪いことをした」

サトヤが答えると、カズキは頷きながらサトヤの眼をまっすぐ見つめて言う。

「確かにそうだがこれはチャンスと思わないか。お前あいつに気があるだろう」

「な、何言って・・・」

サトヤが大きく目を見開き、カズキを睨む。

「隠さなくていい。前にお前と仲がいいムラジと一緒にに任務をした時、聞いたんだ」

サトヤは瞬間顔を赤くした。

「あ、あいつ何言って・・・」

自身の友人の口の軽さにサトヤが怒りの表情を浮かべるとカズキが笑顔を見せる。

「それにお前見てたらわかるさ。態度に出てるよ、だいたい俺も同じ穴のムジナだから」

「え？お前も？カカシを嫌っていると思ってた」

「俺はカカシに告ったんだよ。そしたらあいつなんて言ったと思う？男好きの変態に興味ないってさ」

「変態・・・？」

酷い言葉をサトヤは無意識で反芻する。

「ひでえよな。正直傷ついた。お前もし告ってたら同じこと言われたはずで、付き合える望みはない。でも今のあいつの状態なら俺達の思い通りに出来る」

サトヤの表情が驚きに変わる。

「思い通りってまさか・・・」

「そう、あいつを抱く」

「無理やりならそれは強姦だろ、カズキ・・・」

「サトヤ、こんなチャンスそうそうないぜ。百パーセントの自信を持って言えるが、里に戻ってから俺達にやられたなんて、カカシは告発しねえだろうよ」

「でも、テンゾウは？」

「もちろんあいつは無理だ。カカシのシンパだからな。奴が見張りに出ている時を狙う。それを見越して順番を考えた」

「カカシは俺のせいで怪我をしたのに・・・」

「サトヤ、さっきも言ったがこのチャンスはそうそうあるものじゃない。いいか、俺は一人でも実行する。お前は良心の呵責とやらに抑え込まれて、このチャンスを横で指加えて見ておくのか？」

「それは・・・」

サトヤの表情を見てカズキは頷く。

「決まりだな」

そうして今、カズキはうつ伏せにしたカカシの背中に乗り、その喉元にクナイを当てていた。

「叫ぶなよ。お前が大人しくすれば、手荒にはしない」

「・・・なにをする・・・」

カカシが、身体を抑え込まれて苦しい息の間問う。
「お前を抱くんだよ。男好きの変態の俺たちが」

その言葉を聞いてカカシがハッとしたように、首を回して自分の背中側にいるカズキの顔を見つめた。

「それは・・・」

カカシの呟きは無視してカズキが更に続ける。

「悪かったな、カカシ。仲間が男好きの変態で。お前はその変態に今から足広げてやられるんだ」

カカシまだカズキを見つめている。

「俺は・・・そんなつもりは・・・」

何かを言いかけたが、小さく息を吐き、後は口を閉ざして視線を外し下を向いた。

カズキはカカシのアンダーを一気に両手でずりおろした。すぐにサトヤとタイミングを合わせてカカシを今度は上むかせる。そして上衣のアンダーを今度はクナイで縦に切り裂いた。カカシの肌が露わになり、頭側から見下ろしているサトヤは思わず、唾を飲み込む。

「俺が先だ」

カカシの手は後ろ側で縛っているの、上向きにすると浮いたような不安定な体勢になったが、カズキはお構いなくその上に覆いかぶさり白肌に手を這わす。耳朶を甘噛みし、その間にも指は胸の突起を弄る。

「う・・・」

カカシが噛みしめた口から堪えきれずに小さな喘ぎ声を漏らすと、サトヤも我慢できないというように、カズキの手や唇が及んでいない反対側の耳や鎖骨、乳首などに触れていく。

「おい、邪魔するなよ」

カズキがカカシへの愛撫を続けながら抗議をするが、サトヤはその手の動きをやめない。

「邪魔はしてねえだろ。それより堪らない・・・早くしてくれ」

カズキがカカシの下半身へ手を伸ばす。そうして右足の膝裏に手を入れて、足をぐつと折り曲げた。カカシの秘部を露わにし、カカシの上半身への愛撫を繰り返しているサトヤに声をかける。

「なんか滑るもの出してくれ。軟膏とかでいい」

サトヤは自分のポーチから傷用のクリームを出してカズキに渡す。

「んん・・・ん・・・ん・・・ん」

指にクリームをつけてカズキがカカシの中に指をねじ入れた。カカシの身体がびくつき、抑えきれずに声を出す。

カカシの秘部を溶かすように、慎重にカズキは指を増やす。傷つけないわけではない。ただ、自分を手酷くふったカカシを思い通りにしたいだけ。

「う・・・・」

上半身をサトヤに撫でまわされ、カズキに秘部に指を入れられている中で、カカシはひたすら声を抑えようと耐えている。

カズキはふと疑問に思う。確かにチャクラを使い果たし寝込んでいたが、それでもカカシ程の身体能力があれば、両腕を縛られていてもこの凌辱から逃れる努力をするものではないかと。しかし実際は、カカシは抵抗らしい抵抗をしていない。

それとも噂の半分は真実で、かつての四代目や里への影響力が強い実力者たちに抱かれ慣れているのか。

それも違うとカズキは思う。カカシの中は狭く、そして触れている肌は微かに震えている。身体を委ねることをせずに力が入って、きつとこれでは挿入がより辛いだろうと思わせる。この行動に慣れているとは到底思えない。

カカシが好きだった、いや本当は今も好きだ。だからこそ仕返しをしたかった。でも、この瞬間は仕返しというより目の前の、扇情的な姿態で横たわるカカシへの欲情が自身を支配する。酷いことをしているという自覚も押しのけて。

「うつ・・・うつ・・・」

欲望の赴くままにカズキはカカシの中に挿入する。苦しさに呻き仰け反るカカシの足を掴みより深く、奥へと。

「カカシ・・・力抜かないと、お前が辛いから・・・」

カカシの肌を撫でまわしていたサトヤも、頬を優しくさすり始めてカカシに言う。

「可哀想だけど・・・力抜いたほうが楽だから、カシ・・・」

「あ・・・あ・・・」

何度か二人に声をかけられて、カカシは小さく息を吐く。目じりからは痛みをからくる涙があふれて一筋、また一筋と流れていく。

カカシを征服し見返してやりたい気持ちから始めたことも、今はもうただ好きな人の身体に欲情する獣になっている。

一方でカカシの流す涙に激しい罪悪感はいくつも自覚している。それでも、柔らかな白肌に自身とサトヤが繰り返した愛撫の痕が艶めかしく、時折漏らす声が扇情的で、より深く入り込むと仰け反る首筋が気持ちいを昂ぶらせて抑えきれない。

動きを加速させ、狭いカカシの中を激しく行き来しながらようやくカズキが欲望の全てをそそぎ終えると、サトヤは我慢できないというようにカズキを押しのけてカカシの足元側に回った。

「ごめんな・・・カカシ・・・でももう俺・・・」

言いながらサトヤはカカシの両足の膝裏を抱えて、充分に昂ぶっている自身のものを一気に入れていく。

「んあっ・・・ああ・・・」

カカシはずっと声を上げないように堪えているが、それでも新たな楔に耐えきれずに喘ぐ。

抑え込もうとして掠れる声は余計に欲情が昂ぶる。

カズキはカカシの抑えた声を聞きながら思う。我

慢した方が辛いだろうに、大声を上げてテンゾウに

助けを呼ばないのはなぜなのか。

カズキは上半身側に移動した。お互い相手がこと

に及んでいる時はカカシが反撃しないように見てお

こうと事前に打ち合わせていたが、サトヤに犯され

ているカカシを見るのが嫌で、カズキはサトヤに背

を向けてカカシの顔を見る様に左側に位置した。

「ごめんなカカシ・・・」

サトヤが何度も謝っている声が背中側から聞こえる。サトヤは元々仕返しという意識も持っていない。

自分がこの悪事に引き込んだのだ。でも、自分が欲

情したカカシの肌は、姿態は、その喘ぎは、サトヤ

からも激しい情欲を引き出し、罪悪感を無くしたわ

けではないが、行為をやめることも出来ないでいる

のだろう。

「あ・・・あっ・・・」

カカシは閉じた瞼の眼から一筋の涙を流しながら、

サトヤに揺さぶられている。

自分が首謀者でありながら、サトヤの行為が早く

終わればいいと勝手な事を思い、指でカカシの涙を

拭う。

「ふーっ・・・」

欲望を弾けさせ、サトヤが荒い息遣いをしながら、

カカシから離れる気配がした。

カズキは口づけたくなる。はじめはカカシに反撃

されて嘯まれても困ると思って用心し、口づけはしていない。でも、カカシは抵抗する気はないようだ。

どうしてだろう。どうしてカカシは抵抗しないのか。

その疑問と同時にカカシへの、いまだ残る未練なのか、口づけたいという感情が抑えきれなくなる。

カカシの頬を右手で包み左手でカカシの耳朵に触れる。

口元をカカシの顔に近づけようとしたその時、そつと扉が開きテンゾウが入ってきた。

第六章

テンゾウはカズキと見張りを交代し、捕虜を順番にトイレに行かせて、言われた通り少し離れた木の上で周囲の見張りに就いた。

増援の式を飛ばしたが、それを里が見て隊を送りだし、ここまで辿り着くには半日以上はかかるだろう。三時間おきの見張りもあともうワンクール回つて来るかとも思いながら、あたりを見回す。

しばらくは異常なかったが、二時間もする頃四柱家を建てた裏側の山の中で移動する火らしきものを見つけた。

敵の残党かもしれぬとテンゾウは一気に戦闘モードに入る。自分たちがここにいることを知らずに、松明を焚いて山道を移動している可能性もある。もちろん無関係な旅人ということも。しかし旅人なら

夜にふつう移動しない。いずれにせよ確認が必要だった。

ただ捕虜がいるので一人はここから離れられない。テンゾウは取りあえず木分身を繰り出す。仮に松明の持ち主が敵だった場合のことを考えると、木分身だけでなくカカシと同じ近距離タイプのカズキか、サトヤのどちらかを連れていくのがセオリーだ。

隊長はカズキなので判断を仰ぐと、テンゾウは木分身を捕虜の見張りに残し、本体の自分は一旦四柱家に戻ることにした。カカシが動けないので、尚更用心するよう伝えなくてはならない。

松明らしき火はまだ遠い。焦りは何事もいい結果を残さない。テンゾウは寝ているかもしれぬカカシを起こさないようにそつと扉をあけた。

木の扉の軋む音に、中の人間が一斉にこちらを向く。

その時目にした光景に、テンゾウは一瞬息をするのも忘れた。

カカシが全裸で両腕を縛られて横たわっている。こちらを振り向いた表情からは血の気が引き、その見開いた目からは涙が頬を伝っている。

テンゾウから見て奥の方、横たわるカカシの左側にカズキ、足元にはサトヤがいかにもセックスの事後といういでたちで、まだカカシの膝を左右に広げる様に押さえて座っていた。

テンゾウはふらふらとカカシ達のそばへ歩み寄った。そうして、横に転がる裂かれた寝袋を見、カカシの上着のアンダーが縦に切られて、両脇のところまで止まっているのを見た。先に腕を縛られて、後から上着を裂かれたのだと分かる。

体調も悪いため青白さも加わっているカカシの白肌には、無数の凌辱の痕。精液らしき白濁の液体。

「これは・・・どういうことだ」

怒りで声が震える。

「これは、どういうことなんだ！」

テンゾウは叫ぶと同時に、カズキとサトヤを木遁縛りで締め上げた。

「先輩・・・どうして・・・」

カカシのそばに行き、抱き起して後ろ手の縄を解く。すぐそばにあったリュックから防寒用のマントを出して、全裸のカカシを覆った。

カカシが手の甲で涙を拭うのを見て、テンゾウは手拭いを差し出す。カカシは受け取り涙を拭うと、膝を抱えて子供のようにその上に顔をうつ伏せにした。テンゾウにこれ以上見られるのも質問されるのも拒むというように。

「テンゾウ、見張りはどうしたんだ？」

テンゾウによって木で縛られたまま、カズキが聞いた。

「木分身を置いている。移動する松明らしき火が裏山に・・・木分身を偵察に出すにしても、誰か一人、応援を呼ぼうと、どっちにしろ警戒が必要だところへ伝えなきゃならなかったし・・・それなのに、あんたたちがカカシ先輩をこんな目にあわせているなんて・・・」

それまで立膝をしてうつ伏せていたカカシが顔を上げた。

「怪しい火？だったら確認が必要だ。確かに一人では動きが取れない。テンゾウ・・・二人を解放して」

「でも！」

「捕虜もいる。お前が複数の木分身出しても二人の協力がなければ無理だ・・・俺は今は動けない・・・」

「……くそっ……じゃあ、確認はあんたたち二人で、僕がここに残る。今は取りあえずだ、許したわけじゃない」

「……わかった……」

カズキが抑揚の欠いた声で答えた。

テンゾウが二人の木遁縛りを解放すると、サトヤは慌てて身支度を整えながら、カカシにまた謝る。

「ごめん、ごめんな、カカシ」

カズキの方は無言でカカシを見つめたが、すぐに視線を外して、裏山探索に出て行つた。

二人が出ていくと、テンゾウは改めてカカシのそばに座る。

「カカシ先輩……大丈夫ですか？身体は……」

カカシはテンゾウの方は見ずに小さく首を振る。

「大丈夫、乱暴にはされてない。でも……」

「でも？」

「……お前にこんなところ見られるなんて……。知られたくなかった……」

「先輩が恥じることじゃないでしょう。あいつらが動けない先輩を……僕は、カズキたちが先輩に悪態ついても仲間だと思ってました。まさか傷つけるような事するなんて……油断した自分も許せない」
その言葉を聞いて、カカシは下を向いたまま言葉を続ける。

「悪いのは俺だよ」

「どうして先輩が悪いんですか？」

カカシの言葉にテンゾウは怒気を含めた声で問う。

「俺がカズキさんを先に傷つけたんだ。言葉で……」

「言葉？……」

テンゾウはいつかの樫との会話を思い出す。

『カズキがカカシに悪態つくのはフラれた腹いせだよ』

テンゾウの記憶とクロスする様に、カカシがカズキとのエピソードを話し始める。

「カズキさんが俺のこと好きだって言うから、男好きの変態には興味ない、二度とそんな気持ちで近づかないでくれ、みたいなことを言った。そんな事言われた方は腹も立つだろう」

「だ、だからって、レイブされたんですよ。こんな酷いことされて許すんですか」

「レイブしてやろうって思うくらい、傷ついたんだろきつと……。俺はそんなつもりじゃなかったんだけど……」

そこまで言うとかカシは横に座るテンゾウにもたれなかった。

「ごめん……やつぱちよつときつい」

元々カカシはチャクラ切れで寝込んでいたことを思いだし、テンゾウは慌てた。

「あ、すいません。すぐ寝袋を、俺の分を出します」

「ごめん……」

カカシの分は裂かれており、テンゾウは自分の分を広げて横たえる。

部屋にテンゾウが入った時、凌辱されて涙を流していた。涙なんて見たことがあっただろうか……。

そしてこんな風に謝られると、テンゾウは胸の奥がざわざわと締め付けられる。

横になったカカシの髪が乱れて額にかかり、テンゾウは無意識に指でかき上げた。

カカシがふつと目を上げてテンゾウを見る。

「す、すいません……」

「なんで謝るの？」

「それは……男に触られるのはいやかなと……今、こんな目にあったばかりで……」

「・・・同性とか異性とか、俺は正直そんなにこだわりのないんだ。ただ、優しくされたいいつまでも心に残るから・・・」

「え？」

テンゾウはカカシの言葉の意味が分からず聞き返す。

「カズキさんを傷つける気なんてなかった。そうじやなくてただ俺のことを嫌いになってくれればいいって、そう思ってた。言葉を使ってたんだ。俺は彼を恋愛対象として見てなかったから。優しくされれば、いつまでも心に残って・・・忘れられないから・・・そのほうが辛い・・・」

「先輩？・・・」

「でも、カズキさんは俺のこと嫌いになる以上に心が傷ついたんだろ、きつと。だから俺を・・・人の心って難しい。自分の気持ちもコントロール出来

ないのに、カズキさんの気持ちを勝手に推し測って、俺が傲慢だった」

「それって・・・」

テンゾウは一度言葉を切り、思い切って言葉を続けた。

「それって先輩が誰かを好きになって、優しい人だったけど付き合うことは出来なくて、そして今でも想い続けてるって言うことですか？」

カカシは目を閉じた。

いつまでも忘れられない優しさを置いて去って行った人々。

『カカシ、お前は凄いな。自慢の息子だ、可愛いカシ』

『お前に俺の眼をやるよ、カカシ』

『カカシ・・・好きよ・・・ありがとうカカシ・・・』

『君の気持ちは嬉しい。君が十年早く生まれていて、クシナより先に出会っていたら、きっと君を選んだよ、カカシ……』

カカシは閉じた目をもう一度開けて、天井を見つめながらテンゾウの問いに答える。

「うん、そうだな……俺が好きだった人には、ただ、優しくされて……どうしても忘れられない……」

「忘れられない、それほど好きだって言うことなんですね」

胸の奥のざわざわとした感情が、どす黒く変化していくような、そんな感覚の渦にテンゾウは全身が囚われる。

「先輩さつき……」

「何？」

「さつきはカズキを言葉で傷つけたから、レイプされても仕方ないって言いましたよね」

「仕方ないってことはないけど……そうしたくなるくらい俺が傷つけたんだろうって……」

「僕も先輩に泣かされていますよ。こんな傷ついたことはない。だから僕も先輩を抱いていいですか？」カカシが心底驚いた顔をして、テンゾウを見上げる。

「何の話？……俺がお前をいつ傷つけた……」

「僕はずっとあなたが好きだった。あいつらに犯されているのを見せられて、怒りでおかしくなりそうな程なのに、自分が悪いとか、挙句他の誰かを好きで忘れられないとか、なんだよそれ、僕は何年も何年も、あなたが好きで好きで……それなのに……こんな失恋の仕方ありますか。冗談じゃない！」

自分が何を言っているのか、テンゾウにはもう分らなかった。

「テンゾウ？……」

カカシが片肘をついて上半身を起こす。

「テ・・・んっ・・・」

カカシがもう一度呼びかけたところで、テンゾウにきつく抱きしめられ、口づけをされる。

躊躇なく侵入してきた舌はカカシのそれを絡め取る。執拗に口内を蠢き、何度も何度も角度を変え唇を覆う。ただ巻きつけただけだった防寒用マントがカカシの肩から滑り落ち、上半身が露わになる。その胸の小さな突起をテンゾウは勢いのままに摘まんだ。

「うっ・・・」

それまで受けていた凌辱で痛みが増すだけの刺激に、カカシの身体が硬直する。

そこでようやくテンゾウは自分の暴走にストップをかけ、唇を離れた。

カカシの肌には、サトヤとカズキが付けた痕が残っている。

「・・・すいません・・・」

一瞬その凌辱の痕に視線を向けて、テンゾウは冷静さを取り戻しカカシに謝る。

「キヤパ超える出来事に、今の僕はおかしいんです・・・」

そうして再びカカシにマントを被せた。

「すいません・・・」

自分にマントを被せるテンゾウの腕をカカシが掴む。

至近距離にある互いの顔。

視線が絡み合う。

「・・・ぬな・・・」

カカシの唇が微かに動く。しかしほとんど発音されなかったその言葉は聞き取れない。

「え？なんですか？」

「・・・先に死ぬな・・・」

「え？」

声は聞こえたが、意味が分からずテンゾウはもう一度聞き返す。

カカシは小さく息を吐き、テンゾウを見つめながらその言葉を伝える。

「俺より先に死ぬな。一分でも一秒でもいいから、長く生きろ」

「先輩？・・・」

「返事は？」

「え？」

「返事」

「わ、わかりました・・・」

「口に出して、約束しろ」

「ほ、僕はあなたより長く生きることを約束します」

「良かった」

カカシが微笑む。

そして、もう限界というように再び横になる。そのまま壁側を向いて言葉も発することはなかった。

テンゾウは自分に背を向けているカカシを見つめていたが、やがて自分も壁にもたれて、あらゆる感情が犇めく内面を抑え込んでいた。

憎悪、怒り、悲嘆、後悔、そして疑問。

『俺より先に死ぬな』

どうしてカカシは無理やりに口づけされた後に、そんな言葉を発したのだろう。

やがてサトヤとカズキが帰ってくる。その物音で、カカシが身体を反転させてこちらを向く。

「・・・カカシ大丈夫か？・・・」

カズキの言葉に、テンゾウは睨みつけた。あんたに心配する権利すらないというように。

「状況は？」

カカシの問いにサトヤが答えた。

「ふもとの村の子供が迷子になって、それで村人達が松明焚いて探していた。子供は俺達が見つけたよ」

カズキが言葉を続けた。

「テンゾウ、お前も木分身を解除しろ、疲れるだろう。見張りは、後は俺とサトヤです。カカシも……俺たちが同じ空間にいるのは嫌だろうし」

その言葉には反対する理由がなかった。テンゾウ自身、これ以上サトヤとカズキがそばにいたら、二人に何をしてしまうか分からない。

二人は寝袋を抱えて出て行った。

そこからカカシは再び壁側を向いて横になり、テンゾウも無口に時を過ごす。元々戦闘で疲れ切っている上に、いろいろあり過ぎたので冷静になる時間が必要だった。

更に数時間後に増援部隊が来て、テンゾウたちも帰還する。

里に戻るとカカシはそのまま入院し、数日後退院の許可が出た。

第七章

「じゃ、行きましょうか」

テンゾウはカカシの入院中の荷物を詰めたりユツクを手を持ち、先に玄関へ向かつて歩き出す。

カカシの入院中、テンゾウにも休暇がもらえ毎日見舞いには来ていたが、会話はごくありきたりな内容で、二人とも直近の任務について触れることはしなかった。

自分があんなわけの分からぬ状況で告白し、口づけまでしたことを考えると、テンゾウはワーツと大声で叫んでしまいそうになる。でも、それを気にしてカカシの顔を見る機会を失うのは、少なくともカカシに気に入られている後輩のポジションまで失うのは、それは耐えられなかった。

だから殊更あの一件には触れず、何食わぬ表情を装って見舞いに来ていたのだ。

病院の敷地外へ出たところで、カズキが現れる。

「カカシ、退院って聞いて待っていた」

「あんた・・・よくもカカシさんの前に顔を出せるな」

テンゾウが身構えると、カズキが頭を下げる。

「悪かった」

深く深く頭を垂れ続ける。

「お前が土下座しろというのならそうする。酷いことをしたと、本当に悪かったと、思ってる」

「うん・・・さすがにあれはきつかったけど、そうさせたのは俺でしょ、カズキさん」

カカシの声にカズキが頭を上げた。

「俺は、諦めてさっぱり忘れてもらうために嫌われようと思っただけで、カズキさんの人格を傷つけるつもりはなかった。でも、傷つけていたんだって分

かったよ、俺があんたに言った変態って言葉を使っ

ていたから・・・あの時」

『お前を抱くんだよ。男好きの変態の俺たちが』

「カカシ・・・そう思ってた抵抗しなかったのか・・・」

カズキはカカシが無抵抗だった理由を理解する。

「変態なんて思っていない、あれは嘘だ。嘘であんたを傷つけたから・・・だからお互い様なんだよ、もう今日で謝罪は終わろう・・・じゃあな」

カカシは歩き出し、テンゾウは必死に殴りかかり

たいほどの怒りを抑え、カカシの後を追った。

去っていくカカシを見ながら、無理やりとはいえ

一度抱いてしまい、余計に忘れられなくなったとカ

ズキは思う。

カカシに対し直接罪滅ぼし出来ることはないが、

忘れられない想いを余計に掻き立てられたのが、自分に課せられた罰なのだとカズキは悟る。

第八章

カカシは部屋に戻ると、入院すると消毒薬臭が染み付く気がすると言いつつシャワーを浴びにテンゾウを一人置いてさっさと浴室に行ってしまう。

テンゾウはその間に、カカシが入院するたびそうしていたからそれが自然な動きとなり、リュックから着替えを出して洗濯機に入れ、ついでにカカシが今脱いだものも入れて、脱衣室にラフな室内着を置いておく。

今日退院すると昨日知ってから、すぐにカカシの部屋に来てシーツを洗い、部屋の掃除をしておいた。買い物もして冷蔵庫には新鮮な食品が入っている。

もうずいぶん前になるが、カカシが入院した時着替えの調達を頼まれて合鍵を受け取り、それ以降も合鍵は返さないままこうしてカカシが入院すると、家事をこなしている。

行動だけは付き合ってるみたいだよな、とテンゾウは前向きに考えてはみるが、実際は無料のお手伝いさんでしかない、と、苦笑する。

苦笑しながら、泣きそうになるのをこらえる。カカシが好きだ。こんなにも好きで、この先他の誰かを愛せるのだろうか。報われない想いを抱えたまま生きるのは辛い。そう、カカシの言うように、それは辛い。

「お前も入る？」

「は？」

カカシがいつの間にか浴室から出てきて、テンゾウに声をかけた。

「僕ですか？」

「うん。お前もまだ休暇中でしょ。ゆっくりしていればいい」

ああ、これはきつと夕食も準備しろということだなとテンゾウは納得する。ただ、カカシの顔を冷静に見る心の準備にシャワーはちょうどいいと、浴室に向かう。

テンゾウが浴室から出てくると、カカシがダイニングの椅子に片足だけ膝を抱える様に載せて、昨日買って入れておいたペットボトルのお茶を飲んでいた。

「相変わらず用意がいいね」

カカシは冷蔵庫の方を指しながら言う。

「合鍵、持ってますから。いや、持たされてる？」

「人聞き悪いこと言うなよ。俺がこき使ってるみたいな」

「自覚ないんですか」

カカシがふふつと微かに笑う。

「お前のその親切は、きつと俺にだけだよな。この前・・・俺を好きだつて言つたのは本気なのか？」

カカシのストレートな問いにテンゾウは一瞬動きを止める。ほんの一瞬、息すらも止めてしまい、大きく息を吐いてから話す。身体中の血が沸騰しそうな気恥ずかしさと戦いながら。

「・・・・もちろんそうです。いくら親切心でもここまでしないし、あの場面で冗談なんて言わない」

「・・・・そうだよな。お前は素直でまっすぐな性格で、態度に出ていたから、正直きつと想ってくれているんだろうって気づいてた・・・・でも、そのたびに怖くなる。また同じ思いをするんじゃないか。俺が好きになればまた失うんじゃないか・・・・」

「先輩？」

「父さんも、オビトもリンも、そしてミナト先生も・・・・大切な人が次々と俺の前から去って行った。

誰かを好きになるのが怖い。あの孤独とまた向き合うくらいなら、最初から一人で良いと思つてた。」

『俺より先に死ぬな。一分でも一秒でもいいから・・・・』

ああ、そういうことかとテンゾウは理解する。カカシの、それはおそらく狂気に捉われそうなほどの後悔と孤独。

カカシを、カカシの心を思うと心臓に直接手をかけられたような、そんな痛みを感じる。

『俺より先に死ぬな』

あの言葉は、知り合つて数年経つ中で初めてともしえるカカシの真実の言葉。

「先輩・・・・」

なんて言つていいのか分からない。誰をも寄せ付けぬ強さを持つ狼のような人なのに、内面は孤独に打ちひしがれて震える小鳥のよう。

「それなのにお前が良い男になり過ぎて、自制がきかない」

「・・・？・・・え？」

それはふいに言われたので、テンゾウは言葉の意味がすぐには理解できなかった。

「・・・この前の任務中にカズキさんたちにされたこと・・・俺は男なんだしそんなに大したことじゃないって自分に言い聞かせてたけど、何よりお前に見られた時が一番ショックだった。それで思ったよ、俺はそれくらいお前が好きなんだなって・・・」

「へ・・・？いや、あのカカシ先輩」

「何？」

「それは、それはカカシ先輩が僕を好きってことですか？」

カカシが苦笑する。

「だから今言っただろ。 って言うか、この前も言っただつもりだったけど、お前がその後素知らぬ顔してるから、伝わってないのかと」

「この前？この前っていつ？いつ言いました？」

テンゾウが半ギレのように喚く。

「やっぱり伝わってなかったんだな。だから先に死ぬなって約束させたこと、俺が生きてる間そばにいてほしいから・・・って何度も言わせるなよ。もういい加減分かっただろ」

今度はカカシがむくれる。

「・・・それだけじゃあ普通分らない・・・いや、せ、先輩。僕を僕と付き合ってもらえるんですか。いいんですか」

「・・・約束しただろ」

約束。

カカシより長生きするという約束。

そんな口約束が、忍びの命の保証にはなりえないけれど、それでもその言葉を抛り所に、カカシはもう一度好きになることを、その相手に自分選んでくれたのだと、テンゾウは漸くすべてを理解する。

「どうしよう・・・」

「今度は何？」

「嬉しすぎて、ものすごくキスしたい。キスしていいですか」

カカシがふわっと笑う。

「この前は無理やりしたくせに。何改まっているんだか」

本当はこんな風にカカシは柔らかに笑う人なのだ。この笑顔を、もっともっと見たいとテンゾウはずっと思っていた。

テンゾウはカカシのそばに行き、両頬に手を添えて口づけする。そうして互いに口内をむさぼりながらベッドルームへと移動していく。

ベッドの端に座らせるとその上着を脱がせて、自分も素早く衣服を取り払う。

両肩を掴み、そっとベッドに横たえるとカカシの下衣も足元までぐっと引きおろす。

きめの細かい白い肌が目に眩しい。細身でいて、均整のとれた筋肉質の身体は無駄なものが一切ない。

口づけを交わしながら、テンゾウの指はカカシの胸の小さな突起を探り当てる。先端を摘み優しく揉み解せば、ツンと固くなるのがわかる。感じてくれているのだと思うと、愛しさがこみ上げる。

唇を断続的に重ねながら、テンゾウは首筋、耳朶、鎖骨にも愛撫を載せていく。カカシの頬を押さえる手を左右入れ替えて、乳首も反対側を刺激していく。

「あん・・・あっ・・・」

なんて艶やかな声を出すのだろう。歴戦の忍びとは思えぬ白い肌がほんのりと桃色に色づいて、この人が男娼だったなら間違いないく超売れっ子だろうと真面目に思う。

「あ・・・や・・・」

それなのに、この美しい人は自分の専属なのだ。そう思うと、テンゾウは一層身体が熱くなっていくのを自覚する。

カカシの両膝を持ち、左右に広げる。気恥ずかしそうに顔を横に背ける。テンゾウはカカシの中心に手を添えて刺激を与えながら、もう片方の手で顔を正面に向けて口づけを繰り返す。

カカシが入院する度、その世話や退院準備をしていたテンゾウは、勝手知ったる部屋のベッドサイドの引き出しをあけて、保湿クリームを取り出した。

カカシの両膝裏を持ち、腹側につけるようにしてカカシの秘部を露わにする。臀部ごと手のひらで愛撫しながら今はまだ硬く閉じている場所に軟膏を塗りこみ、指を入れていく。

動悸が激しい、くらくらと眩暈がしそうな感覚にもう頭がショートしかけるが、愛しているカカシと一体になりたいという、男として自然の欲望で意識を保つ。

「あっ・・・」

指を増やすとカカシが小さく喘ぐ。

「う・・・あ、やつ・・・」

指で押し広げながら中のある個所を擦りあげると、カカシの身体がびくと反応し、抑えきれない嬌声を上げる。

「あっ・・・テンゾウ・・・もう・・・ああ」

何も確認をとらずに、カカシの方に受け入れる準備

を強要しているのは自覚していた。最初は快感より痛みの方が強いだろうということも想像つく。せめて少しでもその辛さが軽くなる様にと、テンゾウは前立腺を刺激しつつ、カカシの中を溶かしていく。

「く……テンゾウ……もう……」

中からの刺激にカカシは限界というように、テンゾウの腕を掴む指先に力が入る。

テンゾウはそろそろだと判断し、カカシの両足をもう一度広げながら身体に折り曲げる。

「先輩、力抜いて大きく息をしてください」

そういうとテンゾウは、自身をカカシの中に沈めていく。

「ああっ……」

カカシの首が仰け反る。

「あん……はっ……ああ……」

様子を見ながら、ぐぐつと入れる。

カカシの中は暖かく、その締め付け具合はこれまで経験したことがないくらいの快感をテンゾウにもたらず。慎重に、傷つけないよう最奥まで進めるとカカシは両手でシーツを掴み、再び声を出す。

「んん……あっ……」

首をふり、痛みに耐えている。

「大丈夫ですか？」

テンゾウが問うと、カカシは小さく頷いた。その仕草にどうしても可愛いという言葉が浮かび、でもそれを言えば怒られるのは分かっている、テンゾウは自身の想いを口づけに代える。

カカシが慣れるまでと、テンゾウは奥深く繋がったまますぐには動かずに愛撫を施す。

カカシの身体を深くまげて、繋がったまま口内をむさぼる。耳朵を噛み、白肌にキスを仕掛けていく。

「あ・・・テンゾウ・・・いいから動いても・・・」

潤んだ瞳でそう囁かれると、テンゾウの情欲が解放された。

徐々に、それでも確実にスピードを増しながら動きを加える。

「あ・・・ああっ・・・」

貫きながら、カカシの中心や乳首にも愛撫を施す。

「はっ・・・あん・・・」

喘ぎ声に苦痛だけではない艶が紛れ込んできく。

人間としても、忍びとしても叶わぬカカシの快感を引き出している。そう考えると、更に更にとその喘ぎに導かれるように激しくブラインドし、時に角度や体勢を変えて何度もカカシの中を行き来する。

「や・・・はあうっ・・・」

最後はカカシの身体に被さり、短いストロークからうねる様に大きな動きに変化させ、想いのたけをカカシの中に弾けさせた。

第九章

ぐったりとして手一つ動かすのもおつくうだとい
うように横たわるカカシを、見つめる。

カカシの表情を見たくて、その額にかかる髪をか
き上げた。

「お前・・・俺が退院直後って考えろよ・・・」

カカシが目を開けて呟く。

「無理させないようにつて思っていましたけど、嬉し
すぎて、籠が外れました。僕は昨日今日の気持ちじ
やありませんから」

「俺なんかのどこかいんだか・・・」

窓から夕日が差し込み、カカシの銀色の髪に赤い
光が反射する。

本当に綺麗な人。

改めてテンゾウは思う。

恵まれた容姿、恵まれた才能、誰もが憧れるもの
を持ちながら、自己否定に捉われ心を閉ざす哀しい
人。自分より一秒でもいいから長生きをするという、
そんな不確かな約束に縋る寂しい人。

差し込む夕日が静かにその角度を変えて、カカシ
の髪を染めていく。

「外にデートに行きたいな」

テンゾウは話しかける。

「外？」

「手繋いで歩きたい」

「お前は乙女か・・・そんなの無理でしょ」

「まあ街ではそうかもしれないですけど。でも山な
らどうですか？」

「山？」

「森林浴しながら二人で歩きましょう。手繋いで」

「爺さんみたいな乙女だな。森林浴とか手繋ぎデートとか」

そこでテンゾウの大好きな、ふわっと優しい笑顔をかカシが見せる。

「まあ、それもいいけど」

カカシの返事にテンゾウは努力し続けると心で誓う。

山の中、稍重なり合う木々の隙間から射し込む穏やかな木洩れ日。

闇に向かおうとする彼の手を引き寄せ、その日差しに向かい歩き出す。

僕はいつだって、輝く日差しに向かう礎となる。

カカシに巣食う哀しい闇はそう簡単に拭いは出来ない。

それでも、努力し続けるのだ。

そうしていくつもの時を経て、いつか彼がこの世を去る時、その時まで僕は生き続け、彼の去ったその一秒後に彼の元へ旅立とう。

天国に向かう道でも、僕は彼の手を取り歩きたいから。

終わり